

「新しい掟」

ヨハネによる福音書 13 章 31－38 節

イエスさまは、十字架にかかれる前の晩、弟子たちと一緒に食卓を囲んだ「最後の晩餐」において、弟子たちの足を洗い、「互いに愛し合いなさい」という大切な教を残されました。

この時、イエスさまは、「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった」と語られました。イエスさまは、すべての人々から見捨てられ、十字架につけられる時を「栄光を受ける時」と言われます。私たちが考える栄光といえば、自分が最も輝いていて周りの人たちから称賛されるようなことではないでしょうか。けれどもイエスさまは、人間的に見たら恥辱の極みでしかないような出来事をご自身の栄光だ、そしてまた、神さまの栄光だと言われたのです。

なぜなら、イエス・キリストの十字架においてこそ、私たちを救おうとされる神さまの愛が、救いの御業が顕されるからです。イエスさまは、神さまに敵対し、その栄光を損なう存在でしかなかった私たちの罪を担い、十字架に赴くことで、神の愛に生きてくださったのです。そして、そのイエスさまに対して、神さまが復活をもって応えることによって、十字架から復活へと至る一連の救いの出来事によって神の栄光が現われ、神さまの救いの御業が成し遂げられるのです。

私たちは、神さまの愛の極みであるイエス・キリストの十字架を見ると、自らが、主イエスを裏切る者でしかないという現実を知らされます。しかし、そのような愛に生き得ない私たちの現実のただなかでイエス・キリストが愛に生きてくださった、そのことを知らされるのです。そして、それを知ってしまったなら、キリストの十字架の出来事を、自分に語られていることとして聞かざるを得ないはずでしょう。「わたしはこれ以上愛しようがないほどにあなたを愛している。この愛の中にとどまれ。このわたしの愛の中に生きよ」。これが、イエスさまが与えられた新しい掟です。

この掟は、イエス・キリストを抜きにして、自分の中にある愛で互いに愛し合いましょうというようなことではないのです。私たちの中に愛はありません。弟子のペトロは、イエスさまが引き渡される前、「たとえと一緒に死なねばならなくなっても、私はあなたについて行きます」と言うほど、自分はイエスさまを愛していると思っていました。しかし、もろくもその愛は崩れ去ってしまいました。「私には愛がない」。ペトロは、そのことを嫌と言うほど思い知らされたのです。そして、激しく泣きながら、イエスさまの愛にすがったのです。

イエスさまに愛され、イエスさまによって罪を赦していただいた者は、自らの罪を知ります。私には愛がないことを知らされるのです。そんな愛のない私たちが互いに愛し合うとすれば、イエスさまにその愛を注いでいただかなければなりません。そして、そのために私たちは、愛を祈り求めるのです。それが、イエスさまが教えてくださった「新しい掟」なのです。

「互いに愛し合うならば、それによってあなた方がわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」。そう、イエスさまは約束してくださっています。そして、私たちはこの証しを立てるために、キリストの弟子として召されているのです。